

原書：Amelia Kelley：Gaslighting Recovery for Women：The complete guide to recognizing manipulation and achieving freedom from emotional abuse

ウィルフレッド・ビオン 未刊行著作集

クリス・モーソン編
福本 修訳

誠信書房，A5判174頁，3,630円，2024年7月刊

(さくら精神分析研究室) 清野百合

英国の精神分析家ウィルフレッド・ビオン（1897-1979）は、メラニー・クラインの分析を受けクライニアンに位置づけられながらも次第に独自の理論を提示し、精神病や思考の発達に関して精神分析的な理解を深めることに寄与した。また彼は、数学や神秘主義思想などさまざまな観点から精神分析を捉えなおす試みを続けた。そのプロセスは、1940年代の集団に関する論文、1950年代の精神病に関する論文、1962年から1970年にかけての代表的な4冊の理論書、1970年代のセミナーや講演の記録および戯曲形式のフィクションなどの数々の出版物によって、辿ることができる。

けれども、そうした出版から残念ながら漏れてしまった著作もある。本書には、そのように出版に至らないまま眠っていたビオンの四つの小論が収められている。まず一つ目は、「人間をどう概念化するか」（1961）である。これは同タイトルで出版される予定だった本の一章として書かれたものだが、結局その企画は実現しなかったため、本論文が発表されることはなかった。理論書『経験から学ぶこと』の基礎となる概念や、クラインの投影同一化と内容-容器（コンテイナー-コンテインド）の関連についてなど、前期ビオンの諸概念のビオン自身による解説を、読者は目にすることができる。

二つ目は「貫く沈黙」で、これは1976年12月14日にロサンゼルスで行われた講演の準備としてビオンが録音したテープから、彼の妻フランチェスカが

書き起こした記録である。音、あるいは音がないことをめぐる彼の自由連想風の語りの講演に続き、参加者からの質問に応じて、ビオンは「直観」や「分からなさを持ちこたえること」など、後期ビオンで頻繁に出てくるアイディアに言及している。

三つ目の「新しく改良された」は、1977年9月20日にロサンゼルスで精神分析協会で行われた講演の記録である。この一風変わったタイトルは、当時のケロッグのコーンフレークの箱の宣伝文句からの引用であり、いかにも皮肉屋のビオンらしい題となっている。アンドレ・グリーンから教わった「答えは好奇心の不幸である」というモーリス・ブランショの言葉を彼は紹介し、性急な答えを求めることや「より良くなる」という誘惑的なうたい文句に警鐘を鳴らしている。

そして四つ目は、1968年4月から1969年8月までの彼の思索のメモ書きをまとめた「続・思索ノート」である。本記録はビオンの思索を辿るうえで重要というだけではない。彼は1968年にイギリスからロサンゼルスに移住しているのだが、このメモの中には移住当時のビオンの私的な思いも散見され、ある意味で日記のような要素も含まれている。

以上の四つのテキストに加え、本書には「付録A～D」としてさらなる資料が含まれている。中でもフランチェスカがビオンについて語った「私たちの人生の日々」というタイトルの彼女の手記は、ビオンの仕事および人物像を知るうえで貴重な資料となっている。4本の未刊行の著作および付録はいずれも、ビオンの代表作の背景を理解する際の貴重な資料であり、ビオンに関心のある方には是非一読を薦めたい。

原書：Chris Mawson (Ed)：The Complete Works of W.R. Bion Volume 15, unpublished papers